

猫又とアンニユイ少女

茜咲 桜狐

薄曇り、昼下がり。

両脇の民家の庭木が新緑を付ける頃。

綺麗に舗装された道、特に面白みもない住宅街。

いつものようにヘッドホンで自分の世界に浸る。

拾ってくださいと書かれた、少しボロい、小さな段ボールが視界の端にちらと映った。

「おい、何かは知らんが、生きているのか？」

私はゆっくりとかがみ、ヘッドホンを外して箱の中身に声をかける。声は聞こえないが、段ボールの中ではうにやうにやと、ブランケットにくるまれた何かが動いている。

しばらくそのまま見ていると、やがてブランケットの中から黒い毛並みに黄金色の大きな瞳が顔を出した。

「お主、我を拾ってくれぬか？」

「……はあ？」

その黒毛の生き物——まぎれもない「猫」から発された、明らかな「人語」に、思考が固まる。

「我はいわゆる『猫又』と呼ばれるものじゃ」

「はあ……猫又。」

固まった思考のまま、言葉を反芻する。

こちらの動揺を意にも介さず、相手の、《自称「猫又」》

はなおもつらつらと続ける。

「我の前の飼い主が亡くなってしまっただけ。こうして次に養ってくれる者を探しておるのだ。どうだ、拾ってくれぬか？ 我はかわいいぞ？」

とまるでセールのようになくしたてる。

「……うん。別にいいよ。うちは家族も猫好きだし。」

でも、言葉をしゃべるのは、どうだろう……」

いくらか考えたのち、とりあえず連れ帰ってみることに決めた。

「おお、重畳、重畳！ それでは、これからお世話になるぞ！ お主以外の前ではなるべく猫のふりをしておくから安心せよ」

猫又はその大きな金色の瞳を見開いて、嬉しそうに段ボールの縁に前足をかけた。

こく、と私はうなずいて、段ボールごと持ち上げて、また家に向かって歩き出した。

「そうじゃ、お主、名は何という？」

「私は花梨かりん。国木田 花梨。あなたは？」

ゆっくりと歩きながら、抱えた箱の中の小動物を見つめる。

「我は兼虎カネトラという」

「へえ……黒毛なのに『虎』なんだ？」

カネトラはブランケットの隙間から少し顔を出し、前を覗いている。

「私の最初の飼い主がそう名付けてくれたのだ。理由は確か——『虎のように大きくなれ、然れどもその愛くるしさも残してほしいなあ』とか言っておったな」

「ふふっ、随分かわいらしい見た目のままでしょね」

「まあ、その、虎にはなれなくとも、その分こうして人語もしゃべれる偉大な猫又になることができたからな」カネトラはふふん、と自慢げに話す。

そう話しながら歩いてみると、私の家へと着いた。

リビングにいた親に事情を説明すると、あっさり承諾してくれた。やはり猫が好きだから、という理由らしい。

段ボールを抱えたまま二階へと上がる。そのまま片手で自分の部屋の扉を開け、床の中央に段ボールを置く。置くとすぐにカネトラは飛び出し、床の上にちょこんと座る。

「それでは、改めてこれからよろしく頼むぞ、花梨」

学校の荷物を机の上で整理しながら、これからよろしくね、と返す。

カネトラは周りを軽く見まわした後、

「お主の部屋はなんとも殺風景じゃなあ。ここまで物が少ない部屋は初めてぞ。なにか趣味とかはないのか？」といきなりズバズバと言ってきた。

「別に、趣味はあるし……音楽聞くのはスマホとヘッドホンがあればいいし……」

とカネトラに見せてみる。

「ほう、今どきは音楽を聴くのにそのような小さい絡繰りで済むのじゃなあ」

と感心したように見回している。

「それと、お主は普段も一人で帰っておるのか？ 年頃の人間はもっと他人と遊んでおいた方がいいぞ？」

「……なに、一人じゃ悪いの？ 一人の方が楽だし、別に友達もいないわけじゃ……」

とカネトラを軽く睨みながら答える。

そう、別に、友達はある。——一応。小学校から

の親友であり唯一の友人、橙花^{とうか}。いつも明るく快活な性格で、わりと私とは対照的。でも自分の考えを押し付けたりせず、ゆったりと話を聞いてくれる、そんな居心地のいい相手。

「ほう、そうだったのか。それで、そやつとは一緒に登下校することはないのか？」

と、相も変わらずズバズバと聞いてくる。だんだんと眉間の皺が深まってきた。そんな私の顔を見て、さすがに何か思ったのか、カネトラは立ち上がってクルリと向きを変え、

「……まあ、いきなりいろいろと聞いてしまっすまん

の。ついつい気になってしまいうんじゃ。今までいろいろな人間を見てきたからの」

少し声のトーンを落とし、静かに後ろを向いたままそう言った。

「なんだか悪い気がして、一応質問には答える。」

「別に、そんな聞かれて困ることもないし、いいけど……。さっき言った友達——橙花っていうんだけど。中学入ってからは部活違うし、帰る時間も違うから一緒に帰らないかな。それに、クラス一緒だから学校ではよく一緒にいるし」

「お主はそやつと一緒に帰りたいと思うことはないのか？」

「わざわざ時間合わせてまで一緒に帰る気はない、かな。そこまでのより、やつぱり一人の方が気が楽だし……」

「そこまで一人がいいのか？ ……その割には随分あつさり我を連れてきてくれたようじゃが」

カネトラは再び私の方を向き、ニヤニヤとしていた。

「……別に、あなたのことは人として数えてないから……」

少々その顔がむかついたので、カネトラの問いに若干目線を外しつつそう答えた。

「にや……!?!」

その言葉が予想外だったのか、カネトラは目と口を開けて、猫語まで飛び出していった。

その反応が面白く、思わず声を出して笑ってしまった。

「……やっぱお主、コミュニケーションをとると自体は好きじゃろ。ほら、きつとそやつはお主の言葉を待っておるぞ？ たしかに、その一步を踏み出すのは

疲れるやもしれんが、『大切な親友』くらいには一步踏み出してみてもいいんじゃないか？」

「なっ……! 別に、そんな大切とか……」

カネトラは部屋をぐるぐる回りつつ、呼吸を落ち着かせて「さっきの仕返しだ」とでも言いたげな顔つきで返してきた。

「とにも、まあ、焦らなくてもいい、まずは試してみよ」

カネトラは再び座りなおしてそう言った。

それから数日後。

太陽は天頂付近。そしてもうすぐ授業の終了、そして昼休みを告げるチャイムが鳴る。

キーンコーンコーンコーン——

その音が鳴り終わらないうちに、生徒たちは各々それぞれの目的の場所へと動き出す。そして私も、通学バッグからお弁当を取り出すと、教室の後ろ側かつ窓際の席——橙花のいる場所に向かう。

いつものように机を向かい合わせ、最近リリースされた新曲だとか、今日の授業の感想だとか、他愛もない会話をしながらお弁当を食べてゆく。

二人ともお弁当を食べ終わりそうになったころ、勇気を出して、聞いてみた。

「——その、さ。もしよかったらなんだけど、今日、久しぶりに一緒に帰らない？ ……かなって」

その言葉を直視して言うことはできなかった。目を伏して、返事を待つ。

数秒、いや、数十秒だろうか。とても長く感じたが、「まじで！？一緒に帰れるの！？いいの？やったー！」

橙花は私の両手をつかんで、鼻先がくつききそうな距離まで近づいて、その大きな目をキラキラさせていた。

かと思いきやいきなりバツと立ち上がり、両手でガッツポーズしたかと思いきや、ハツと口を開け、

「え、でも私今日六時半まで部活だよ！？いいの？」と、眉を八の字にしたお手本のような困り顔で確認してきた。

久しく見ていない荒ぶりよりの橙花に対して、そこまです喜ばれると思つてなかった私は、思考が追い付かずぼかんとしていた。

ようやく思考が追いついて、「あつ、う、うん！今日教室で勉強していこうかと思

つて。だから一緒に帰りたくなって」

と慌てて説明する。

「えへへ、ありがとう花梨！——うわく、一緒に帰れるのめっちゃうれしいわ！」

「こちらこそありがとう。そんなに喜んでくれると思つてなくて……とつても嬉しい」

「花梨のそんな笑顔、久しぶりに見たなあ……すごいかわいい……」

と橙花がにやにや顔で言ってきた。

自分の顔を触ってみると、どうやらいつの間にか口角も上がって、笑っていたらしい。

「んんっ、ほら、まだお弁当食べ終わってないから。昼休み終わっちゃうよ」

咳払いしつつ、いつもの調子に戻す。

それからしばらく経って、放課後。

学校ではめつたにやらないテスト勉強を、だれもない教室でしていた。普段家でテスト勉強をしている私は、静寂の中に紙をめくる音やペンの書く音が鳴り響くのが落ち着かず、なかなか進まなかった。

学校で堂々と本来持ち込み禁止のヘッドホンを付けるわけにもいかず、

「はあ……これならやつぱり家で勉強したり、音楽聞いたりしてる方が……」

と誰もいない教室でひとりごちたとき、さっきの橙花の反応を思い出した。

そして同時、カネトラが言ったことも脳裏によぎる。

「……カネトラの言った通りに進んでるのは癪だけど、まあ、あんだけ喜んでくれるなら、たまにはいっか……」

——としばらくいろいろ試しつつ勉強していたが、結局あまり集中はできなかった。

廊下からはまばらにワイワイとした声が響き始め、運動部があがってきたらしい。

いつ橙花が来ても帰れるように、勉強道具をバッグの中にしまっていく。

それから間もなくして、

「ごめん！ おまたせー！」

ガラガラ、と教室の扉を勢い良く開けて、橙花が教室に飛び込んできた。

「そんなに急いでるわけじゃないから……もつと落ちて着いてからで大丈夫だよ……？」

と椅子に座ったまま声をかけると、

橙花はバッグからスポーツドリンクを取り出して、勢いよく飲んでいった。

「——ぶはあ、ありがとね、花梨が待ってると思ったら、

早く帰ってきたくて！」

「ふふつ、こちらこそありがと、橙花」

それから二人で校門を出た。

「うわあ、この時間帯の空、すごいきれいなんだね」

ふと空を見上げると、橙、藍、紫がまじりあつた空にいくつもの星が浮かんでいた。

「ほんとだ。でも、普段はここまできれいじゃないよ。今日は特別澄んでるみたい」

二人で空を眺めながらゆっくりと歩いていく。満天の星々を見ながら。風の音、虫や木々の音。それらと交じり合う私たちの声。

そこには一人、ヘッドホンを付けて歩いてるときには出会えなかった「世界」があった。

「あつ、そういえばなんで今日は一緒に帰ってくれたの？」

と橙花がふとこちらを向いて聞いてきた。

「ん、それは……。うん、たまには、一緒に帰るのもいいかな、って」

確かに、唐突に誘うのも不自然だ。そのあたりの言い訳は全く考えていなかった。

そのせいで目を泳がせつつ、歯切れの悪い返答になってしまった。

「へえ……そっかあ。ウチね、花梨と帰るのが好きな

んだ。なんか、時間がゆっくりに感じて、リラックスできるの。でも中学の部活始まってから、花梨と全然一緒に帰れなくなっちゃったからさ……。こうして、今日一緒に帰れてうれしいんだ！」

橙花は私の前に顔をのぞかせ、にこっとはにかんだ。付け加えるように、

「——また今度も、一緒に帰ってくれる？」

「まあ——たまになら、いいけど」
橙花を直視することができず、目線を外して答える。

それから、いつもの昼休みのように、他愛のない会話をしつつ家路をゆったりとした足取りで歩く。橙花は相変わらずのテンションで、ずっと嬉しそうにしていたが、歩幅はずっと私に合わせてくれていた。

家につくと、ただいまーとだけ言って自分の部屋に向かう。

部屋に入ると、カネトラがベッドの上で丸くなっていた。

「おお、帰ってきたか、花梨。———なにか、いいことでもあったかのような顔をしておるのう」

「……うっさいなあ、別になんも」

「お主もそんな笑顔をすることがあるんじゃないか」

その言葉に、自分の顔を触ってみると、橙花に言われた時と同じように、自分の口角が上がっていることに気が付いた。自分の素直な表情筋を恨めしく思いつつ、

「……はあ。出会って数日のあなたに言われるのは納得できないけど。——今日、橙花と一緒に帰ってきたのよ」

「まあこの部屋から一緒に帰ってくるのが見えておったしな」

カネトラは立ち上がって、体をぐーっと伸ばしながら、さらっと言ってきた。

「ならなんで聞いたの……！」

カネトラは私がキッと睨んだ視線をかわすようにクルリと回り、

「一応の確認じゃ。我はお前の親友なる橙花という人間を知らんからな。———して、どうだったかの？」

他人ひとと一緒にいるのは」

「まあ、たまには、いいかな。『大切な人』と一緒にいるつてのは」

すこし間をおいて、

「あまり一緒にいたら、私の世界が壊れてしまいそうだから。たまに、でいい」

そう言って私はヘッドホンをつける。

「にや……！！ 我はお主の世界にはいらないうつてことか！？」

とカネトラがあわてて近寄ってくる。

「うっさいなあ。たまに、でいいのよ。そこがあなたと橙花の違い」

そう言って私はスマホを操作して再生した。

この前リリースされた、橙花が昼休みに言っていた曲を。